「星空の夜」のワルツ

煌々と明かりが街を照らして、人びとから星空を奪ってしまっているのが今日の社会です。暗いがゆえに、見え、明るすぎて見えないものがあります。多くの人は、資本主義の下で、儲けることには異常に関心が高いのですが、そうでないこととなると途端に関心が薄くなります。このことで、社会には必要なのに放置されたままのことがいかに多いことでしょう。豊かな情操、感性を養う機会が少ない社会は、創造的な人を育てるには不向きです。自然と人間社会との関係を、もっと身近、融和的に再構築しなければならないと思います。

一方で、プラネタリウムに多くの人びとが押しかけるように、誰しもまるで本能のように、星座や星空に郷愁を抱いています。お金を出してでも見るのですから、天体に想いを馳せる時間を持つことは価値あること、よいことにちがいありません。ですから、国民の祝日に、「宇宙の日」があってもいいし、「空の日」があってもいい。けれどもなかなかそうもいかないでしょう。

そこで提案したいのが、年に一度、星空に想いを向ける取り組みを行うこと。この夜になると、上向きのライトは消灯し、一定時間には支障がない限り、明かりを消して星空を鑑賞します。

人びとは山に登り、海岸に出て空を見上げ、思い思いの祈りを捧げることでしょう。それを九州のどこからかはじめます。熱心な人であれば、星野村、阿蘇山、霧島山、糸島の海岸、といった見晴らしの良い所に集って感動のひとときを持ち、星について語り合います。そこはいずれ星のメッカと呼ばれることでしょう。

子どもたちには、月や星や宇宙にまつわる話を聞かせ、望遠鏡をのぞき見て星座を探し当てたらご褒美をあげ、大人たちもかつて「山男の歌」がはやったように純情な歌を歌い、皆が仲間になって広大な宇宙の歴史の流れの中に生きる我々を寿ぐこととしましょう。こうして集った仲間は、いつか北極に行ってオーロラの神秘に触れるなどして、広大な宇宙への意識が高まり、生きる悦びにも連なっていくことでしょう。